



TITLE:

北米大学図書館訪問記(1) - 電子ジャーナル編 -

AUTHOR(S):

富岡, 達治

CITATION:

富岡, 達治. 北米大学図書館訪問記(1) - 電子ジャーナル編 -. 静脩 2001, 38(2): 7-10

ISSUE DATE:

2001-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37628>

RIGHT:

北米大学図書館訪問記（１） 電子ジャーナル編

総合人間学部整理掛 富岡達治

1. はじめに

私は、2000年10月13日から2週間、「平成12年度京都大学教育研究振興財団助成金第1類第1種（派遣）」の助成で、北米の大学図書館へ研修派遣の機会を得ました。

訪問した図書館はトロント大学、ピッツバーグ大学、Northern Regional Library Facility（カリフォルニア大学）、Southern Regional Library Facility（同上）、カリフォルニア州立大学ノースリッジ校ですが、今回は、電子ジャーナルを主たるテーマとして、トロント大学とピッツバーグ大学について報告したいと思います。

2. 目的

当時、私は附属図書館情報管理課受入掛において、外国雑誌の受入業務を担当していました。その中で、多くの比重を占めるようになった業務が、電子ジャーナルでした。しかし、図書館資料としての歴史は浅いため、どのように取り扱えばよいのか、手探りの状況でした。そのため、電子ジャーナルのような電子的資料について、海外の図書館ではどのように取り扱っているのか、とても興味がありました。

また、電子ジャーナルのような、ネットワークを利用して入手できる電子的資料が増えてきたといっても、従来型の図書館資料を見過ごすわけにはいきません。いわゆる「本」の形態をとる資料は、なくなるわけではなく、むしろ増える一方です。しかし、すでに狭隘化した現在の施設にはそれらを収容する能力はなく、一刻も早い「保存図書館」の確立が望まれています。そこで、従来型の「本」と電子ジャーナルのような資料を海外の図書館ではどのように管理し、提供しているのかを考察することにしました。

3. トロント大学（University of Toronto）

カナダ南東部に位置するトロント（City of Toronto）は、20世紀半ばから急速な発展をとげたカナダの金融と文化の中心地です。「トロント」とは先住民族インディアン言葉で「人々が出会う場所」という意味ですが、政府の積極的な移民政策の結果、非常に多民族となった都市はまさに「トロント」とであると言えます。

トロント大学は、1827年創設のキングス・カレッジを前身とするカナダ随一の大規模大学です。1897年に創設された京都大学より70年も早く出発しています。キャンパスは、メインとなるセント・ジョージの他に、東のスカーロー、西のエリンデールの3ヶ所があります。セント・ジョージ・キャンパスは、トロント市街のほぼ中心に位置し、石造りの重厚なゴシック建築から近代的なビルまで、広大な敷地に立ち並びます。ちょうど、紅葉が始まった時期でもあり、まるで映画のような景色は今でも印象深く残っています。



ロバーツ図書館（トロント大学）

3.1. ロバーツ図書館 (Roberts Library)

トロント大学には大小合わせて40余りの図書館があり、中央図書館にあたるロバーツ図書館は600万冊の蔵書を誇ります。この建物は三角柱の変わった形状をしており、ガイドマップ上でもひときわ目を引くものでした。これは、カナダのシンボルである楓(かえで)の葉をあらわしているとのこと。実際にその前に立つと、その巨大な姿に圧倒させられました。

ロバーツ図書館の1階部分は、銀行であるScotiabankが出資した「Information Commons」という情報スペースがあり、端末、プリンター、スキャナ等が開放されています。端末は、立ったまま利用できるものと、座って長時間利用できるものとが用意されていました。さらに、ヘルプデスクでは、個人所有のコンピュータ用に、必要なソフトウェアを収納したCD-ROMをスターター・パッケージとして無料で配布しています。

図書館利用証は、「TCard」と呼び、学生証、職員証と一体化されています。TCardの発行と同時に電子メールアカウントも発行されます。また、このカードにはICチップが埋め込まれており、入金可能なプリペイドカードとして、コピー機やプリンター、さらに、大学内の自動販売機の使用もできます。ちょうど京都大学で学生証・職員証を磁気カード化するという時期でもありましたので、この機能的なカードには非常に魅力を感じました。

3.2. 電子ジャーナルについて

トロント大学図書館では200タイトルほどからスタートした電子ジャーナルですが、2001年7月末時点で有料・無料を含めて約14,000タイトルが提供されています(複数サービスによる重複含む)。スタート当時はそれほど利用はされなかったようですが、トロント大学図書館では、この状態を提供したタイトル数が少ないためと分析し、より多くのタイトルを提供したところ、利用が増加していったとのことでした。

前述の3つのキャンパスは、セント・ジョージ・キャンパスを中心として、東西にそれぞれ15kmほど離れていますが、電子ジャーナルの契約は、基本的に1サイトとして契約するように、出版社と交渉しています。これは、トロント大学の最高意思決定者である学長(President)は1人であり、財政基盤も1つであることに基づいています。日本で、欧米特にアメリカの出版社と話し合う場合、「サイト」の定義に、お互いの理解のズレをよく感じます。トロント大学での事例は、同様に複数のキャンパスを抱える日本の大学にとって、非常に参考になると考えます。

また、電子ジャーナルをはじめとする電子的資料の選定はEIRC(Electronic Information Resources Committee)によって行われています。EIRCでは新たな電子的資料の選定とともに、その購入資金を確保するため、中止対象資料の選定も行っています。昨年は、すでに電子的資料で提供されている冊子体の索引・抄録誌について検討し、中止のためのガイドラインを策定したとのこと。

4. ピッツバーグ大学(University of Pittsburgh)

かつて鉄鋼の町として栄えたピッツバーグですが、現在はハイテク産業、教育、医療の中心地として発展し、アメリカで最も住みやすい町(Most Livable City)にも選ばれました。

ピッツバーグ大学は、1789年創立の州立大学で、ダウンタウンの東部、オークランド地区に位置します。この地区にはピッツバーグ大学の他にもカーネギー・メロン大学や博物館、美術館、図書館などが建ち並んでいます。キャンパスと町との境界はほとんどなく、町全体が大学という印象を受けました。

ひときわ目を引いてそびえ立つカテドラル・オブ・ラーニング(学問の大聖堂)には、ナショナルリティ・ルームズと呼ばれる各国の特徴を凝縮した教室が並んでいます。日本ルームには、床の間や掛け軸、障子などがあり、少し違和感

があったものの、心が和まされました。これらの教室は実際に授業で使用されており、フラスルームのように豪華絢爛な教室で受ける授業はどんなものだろうと、想像したりもしました。



ヒルマン図書館（ピッツバーグ大学）

4.1. ヒルマン図書館（Hillman Library）

ヒルマン図書館は、ピッツバーグ大学の中央図書館で、人文・社会科学系資料を蔵書の中心としています。

「Historic Pittsburgh」は、ピッツバーグに関する資料の電子化プロジェクトで、1998年に開始されました。このプロジェクトでは、1920年代以前に出版されたピッツバーグに関する資料や地図、人口調査などを電子化して提供しています。

また、電子化だけではなく、資料の保存という点にも熱心で、ヒルマン図書館の資料保存部門（Preservation Department）では、紙質が悪く、劣化した、または劣化するであろう資料の脱酸処理やマイクロ化などを行っています。脱酸処理装置も設置され、少量であれば自前で処理するとのことでした。1999年からは、人文科学基金（National Endowment for the Humanities）から219,000ドルの助成を受け、ポリビア資料コレクションのマイクロ化も行っています。これらは、ポリビア独立戦争やポリビア革命、言語、文化にわたる、非常に広範なコレクションです。仕上がったマイクロフィルムは、1本ずつ解像度や濃度をチェックし、品質管理の徹底

ぶりを窺い知ることができました。

4.2. 電子ジャーナルについて

ピッツバーグ大学では、現在、4,400タイトルの電子ジャーナルを提供しています。新規に導入する場合、NRWG（Networked Resources Working Group）での協議を経ます。NRWGの構成は、図書館の管理職をはじめレファレンス・ライブラリアン、システム関係者などです。また、NRWGでは電子ジャーナルだけでなく、CD-ROM等も含めたネットワーク資料全般を検討します。

検討過程は非常にシステム化されており、新規に購入を希望するものがあれば、Web上に用意された専用のフォームで申し込みます。記入する主な項目は、以下のようなものがあります。

- 商品名
- スタンドアロンかネットワークか
- 買い切りか購読（Subscription）か
- メディアは何か（CD-ROM、WWWなど）
- 必要システム
- URL
- 収録範囲
- デモやトライアル期間の有無
- デモやトライアルのフィードバックの有無（利用統計など）
- 利用対象者
- 提供内容（フルテキスト、コンテンツなど）
- 同時ユーザ数や機能数の制限があるか
- 価格（初期費用、ネットワーク料金等も含む）
- 支払方法等
- 他の商品とのパッケージ購入が必要か
- License Agreement（のURL）

検討の流れは図のようになります。ここで、興味深かったことは、ライセンス・レビューの過程で、出版社との交渉は大学の法務部門で行われることでした。また、処理状態もWebで公開され、自分が申し込んだ資料についての検討経過を確認できるようになっています。

5. おわりに

京都大学では、雑誌の選定や購入は「調整された分散主義」のもと、各部局で行って来ました。電子ジャーナルも同様で、当初、電子ジャーナルの利用は冊子購読者に与えられた特権、あるいは冊子のおまけといった認識が強く、あくまでも購読者（部局）単位の利用が主だったように思います。

しかし、最近では冊子の購読がベースであっても、京都大学全体で対応しなければならないケースが増えてきており、雑誌の選定および購入経費の確保を部局に任せている現状では、部局間の障壁が大きな課題となっています。

昨年度から行っている外国雑誌の重複調整で、全学的共同提供・利用体制への第一歩を踏み出すことができました。しかし、その財政的基盤は非常に不安定で、継続的・安定的運用のため共通経費の確保が望まれます。

今回、海外の大学図書館を見学し、大学全体の研究情報の流通する基盤を整備する必要性をあらためて痛感しました。

次回は、カリフォルニアでの保存図書館について、報告します。

（とみおか たつじ）

図. NRW の処理フロー

